

1 左室内血栓を合併したネフローゼ症候群の1例

○松山 紗綾、小河 純、原 淳一、
熊谷 正純、鈴木 清、熊谷 二郎
横浜市立みなと赤十字病院 検査部

【はじめに】ネフローゼ症候群(NS)の合併症として血栓症はよく知られており、好発部位として肺動脈・深部静脈・腎動静脈・鼠径動脈などが挙げられる。形成された血栓によって脳梗塞や心筋梗塞・腎梗塞を併発することもあり、血栓検索はNSにおいて重要である。

本邦ではNSに合併した心臓内血栓では左房が多く、心室、特に左室内血栓の報告は非常に少ない。今回われわれは左室内に血栓を認めたネフローゼ症候群を経験したので報告する。

【症例】16歳男性、腹痛・下痢・嘔吐で当院救急外来に搬送された。来院時検査所見はAlb1.4 g/dl、Cre 0.78 mg/dl、WBC14900/ μ l、Hb20.5 g/dl、Fib832 mg/dl、D-Dimer20.5 μ g/dl、尿蛋白3+、尿糖-。低蛋白血症・尿蛋白と来院時のCTより、ネフローゼ症候群及び腸管浮腫と診断され、ステロイド治療が開始された。第3病日にAlb 1.0 g/dlに低下、D-Dimer 38.6 μ g/dlに上昇し、新たに胸痛が出現した。そのため、血栓検索目的で施行された造影CTで肺血栓症と左橈骨動脈血栓症を認め、抗凝固療法が開始された。第4病日に施行された心臓超音波検査で左室内に14×16mm大の腫瘤を認めた。腫瘤は可動性のある血栓であり、血栓は僧帽弁輪より8 mm心尖部側の

後乳頭筋背側に付着していた。心機能は良好で左室壁運動異常(Asynergy)は認めなかった。その後、技師と医師でフォローを行い、縮小傾向を示していき、第11病日に血栓の消失が確認された。抗凝固療法開始から9日目であった。

患者は治療の効果もありネフローゼ症候群が寛解し、第48病日に退院した。

【考察】NSは血栓形成の頻度が高い疾患であり、NSの治療でよく用いられるステロイドには凝固促進作用による血栓症の副作用があることも知られている。しかし、心機能が良好な若年者で左室内血栓の報告例は非常に少ない。また、今回の症例ではNS及びステロイド投与の2つの要因により、全身が著しい血栓傾向となり、NS発症早期に左室内血栓を生じたと考えられる。血栓は抗凝固療法により4-8週間で消失することが多いとされるが、今回は第11病日で消失しており、治療が著効し喜ばしい結果であった。

心機能が良好な若年者に左室内血栓が発症する可能性は極めて低いが、原疾患にNSがあり、なおかつステロイド治療がされている場合は、血栓症も考慮したうえで検査を行なう必要があると考える。

連絡先 045-628-6100(内線 2357)